

## 宇田方程式の多体量子力学描像

宇田雄一

Many-body Quantum Mechanics Picture of Uda Equation

*www.GrammaticalPhysics.ac*

Yuichi Uda

日本物理学会 2014 年秋季大会 20pSE-2 で私によって発表された力学系を規定するハミルトニアンは、量子力学においては次の  $H$  だ。

$$H = H_0 + H_1 \begin{cases} H_0 \equiv \frac{1}{2m\epsilon\alpha^2} \sum_{k=-\infty}^{\infty} [(P^k)^2 + m\alpha(P^k X^k + X^k P^k)] \\ H_1 \equiv -\frac{1}{\epsilon\alpha} \sum_{k=-\infty}^{\infty} P^k X^{k+1} \end{cases}$$

$(P^k)^2 + m\alpha(P^k X^k + X^k P^k)$  の固有ベクトルの座標表示  $u$  が固有値  $e$  に属する事を表す式は、

$$\left[ \left( -i\hbar \frac{d}{dx} \right)^2 - i\hbar m\alpha \left( 1 + 2x \frac{d}{dx} \right) \right] u(x) = e u(x)$$

この方程式を解くと、次の解が得られた。

$$u(x) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n x^n \begin{cases} 2\hbar^2 a_2 + (e + i\hbar m\alpha) a_0 = 0 \\ \hbar^2(n+2)(n+1)a_{n+2} + [e + i\hbar m\alpha(2n+1)]a_n = 0 \quad (n \geq 1) \end{cases}$$

$(a_0, a_2, a_4, \dots)$  と  $(a_1, a_3, a_5, \dots)$  は完全に独立なので、各  $e$  の固有空間は次の 2 つの関数を座標表示に持つ 2 つのベクトルによって張られる 2 次元空間だ、と分かる。

$$u_{e1}(x) = \sum_{n=0}^{\infty} a_{2n+1}(e) x^{2n+1}, \quad u_{e2}(x) = \sum_{n=0}^{\infty} a_{2n}(e) x^{2n}$$

全空間の基底ベクトルとして、座標表示が  $\prod_{k=-\infty}^{\infty} u_{e(k)i(k)}(x^k)$  という直積で表される物を採用すれば、一般のベクトルは

$$\Phi[x] = \left[ \prod_{s=-\infty}^{\infty} \int_{-\infty}^{\infty} de_s \prod_{i(s)=1}^2 \right] A[e, i] \prod_{k=-\infty}^{\infty} u_{e(k)i(k)}(x^k)$$

という風に展開され、 $H$  の固有値ゼロに属する固有ベクトルを求める問題は、 $H\Phi = 0$  を成り立たせる  $A$  を求める問題に帰着する。 $H = H_0 + \beta H_1$ ,  $A[e, i] = \sum_{r=0}^{\infty} \beta^r A_r[e, i]$  と置いて摂動法を使うと、次の特殊解が得られた。

$$A_0[e, i] = \prod_{k=-\infty}^{\infty} \delta(e_k)$$

$$A_1[e, i] = 2m\alpha \sum_{k=-\infty}^{\infty} \frac{1}{e_k + e_{k+1}} \left[ \dots \delta(e_{k-1}) \eta_{3-i(k)}(0, e_k) \xi_{3-i(k+1)}(0, e_{k+1}) \delta(e_{k+2}) \dots \right]$$

ただし、 $x u_{ei}(x) = \int de' \xi_i(e, e') u_{e',3-i}(x)$ ,  $-i\hbar(d/dx)u_{ei}(x) = \int de' \eta_i(e, e') u_{e',3-i}(x)$  とする。